

## 研究経過報告（1998年8月～2000年9月）

中谷素之

助手に着任してから2年余りが経過した。同じところに所属していながら、大学院時代とは大きく異なる生活になかなか慣れることができず、迷いばかりの時期であった。正直に言っていまだ暗中模索の状態であり、最近では迷いつつ研究活動を探ってゆく他ないと覚悟するようになった。時間を有効に使うこと、そして自分自身を動機づけることの重要性を今更ながらに痛感している。

以下、これまで2年間の研究経過を報告する。

### 1. 社会的責任目標に関する研究

大学院時代より継続してきたテーマであり、研究活動の中心的課題である。これまでの動機づけ研究で考えられてきた達成目標理論の枠組みを拡張し、社会的文脈を考慮した動機づけ過程を明らかにしたいと考えている。これまで、いくつかの観点から社会的責任目標に関する研究を進めてきた。

#### (1) 学業達成過程

社会的責任目標が動機づけに及ぼす影響過程に関する研究では、以下の研究を行った。これは児童の社会的責任目標が規範的な学習行動を導くことで、学業成果に結びつくプロセスについて検討したものである。

中谷素之 教室における児童の社会的責任目標と学習行動、学業達成の関連 教育心理学研究 第46巻3号 pp. 291-299. 1998. 9.

#### (2) クラス適応

また、社会的責任目標のもつ影響をより広範にとらえ、4年から6年への縦断的な適応状態の変化にどのような影響をもっているかについて検討を行った。この成果は、クラス適応という観点から、教育実践及び臨床的な色合いの強いカウンセリング研究に発表した。

中谷素之 児童の社会的責任目標がクラス適応に及ぼす影響—その長期的影響の検討— カウンセリング研究 第32巻2号 pp. 173-181. 1999. 6.

#### (3) 協同学習活動

1999年末に、小学校の授業でのグループ学習の実践を何度か観察させて頂く機会があり、このようなテーマについても研究を行いたいと思うようになった。我が国の小学校教育でよく実践されるグループ学習活動は、児童どうしの人間関係を媒介とした学習過程であり、そこには児童の社会的目標が大きな意味をもつ可能性がある。同じくグループ学習に関する研究に興味をもつ大学院後期課程の出口拓彦との共同で、以下のような研究を行った。また、日本教育心理学会においてもポスター発表を行った。

出口拓彦・中谷素之 グループ学習中の相互作用に及ぼす教師の介在および児童の社会的責任目標の影響 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学） 第47巻 印刷中 2000. 12.

中谷素之 協同学習における社会的責任目標の影響—小学校4年のグループ学習における実践的研究— 日本教育心理学会第42回総会発表論文集 p. 582. 2000. 9.

#### (4) 社会的責任目標の促進

教育実践的な視点から考えるならば、児童の社会的責任目標がどのような要因により影響されるのかは興味深い問題である。ここでは児童の目標形成に影響を与える要因として教師の指導行動を取り上げ、目標との関連について検討を行った。ワン・ショットの調査研究ではあるが、1000人ほどの小学生を調査対象にできたことは有意義であった。その成果は、日本心理学会にて発表を行うとともに、ストックホルムで開催された第27回国際心理学会議にて発表した。恥ずかしながら海外における研究発表は初めてであり、準備から発表に至るまで全てよい経験になり、また英語力の必要性をとみに実感する機会となった。

中谷素之 社会的責任目標を促進するクラス構造—教師の働きかけと児童の社会的責任目標との関連— 日本心理学会第62回大会発表論文集 p. 380. 1998. 10.

NAKAYA, Motoyuki The influence of classroom structure on children's social goal. X X VII International Congress of Psychology, p. 334. 2000. 7. (Stockholm, Sweden.)

## 2. その他の研究

### (1) 人間関係規範に関する研究

社会的責任目標の基盤には、人間関係の元になる社会的規範の認知があると考えられる。以下では、中学生を対象とした自由記述によって、人間関係に関する規範認知についての研究を行った。素朴なデータではあるが、児童、生徒の社会的規範や社会的責任について考える上で参考になった。

中谷素之 教室における人間関係規範—中学生の教師—生徒関係規範・友人関係規範— 日本教育心理学会第41回総会発表論文集 p. 705. 1999. 8.

### (2) 感情調整に関する研究

この時期には、大学院後期課程の鈴木有美、木野和代及び速水敏彦教官とともに、大学生の感情調整に関する研究を行った。

自己と他者に関するメタ・ムード—不快感情の調整過程に焦点を当てて— 名古屋大学教育学部紀要(心理学) 第46巻 pp. 119-129. 1999. 12. (鈴木有美, 木野和代, 速水敏彦と共著)

自己と他者に関するメタ・ムードⅠ—共感性との関連— 日本心理学会第63回大会発表論文集 p. 801. 1999. 9. (鈴木有美, 木野和代, 速水敏彦と共著)

自己と他者に関するメタ・ムードⅡ—他者の不快感情の調整に関わる要因の検討— 日本心理学会第63回大会発表論文集 p. 802. 1999. 9. (木野和代, 鈴木有美, 速水敏彦と共著)

## 3. 現在計画中あるいは進行中の研究

### (1) 青年期の余暇活動と動機づけに関する研究

動機づけ研究では、学業や仕事といった本業としての課題の側面に焦点を当てたものが多い。しかし本業以外の生活の側面も個人の心理的要因に重大な影響力をもっ

ている。現在余暇活動と動機づけや精神的健康との関連についての研究を検討中である。1年ほど前から動機づけに興味をもつ大学院生と動機づけ研究会を行っており、大学院後期課程及び前期課程の院生6名と定期的なミーティングをもち、具体的な研究について計画している。

### (2) 児童、生徒の向社会性と学習活動に関する研究

現職の小学校教員2名、及び大学院生の出口拓彦とともに、小、中学生における社会性と学習活動の関連に関する研究をスタートしている。現在は探索的に児童、生徒の社会性に関する複数の指標を測定し、学習行動との関連を検討している。教育現場での問題意識と教育心理学的な研究との接点を見出すための有意義な機会になっている。

## 4. その他(著書, 学会活動など)

以下の著書において、学習動機づけに関する章を執筆した。

中谷素之 学習の動機づけ 速水敏彦・吉田俊和・伊藤康児編著 生きる力をつける教育心理学 ナカニシヤ出版 印刷中(2001. 3. 出版予定)

また、動機づけ研究会の面々と大学院生発行の論集の中で討論論文を執筆した。内容的には恥ずかしいばかりのものであるが、近い領域に興味をもつ大学院生とのコミュニケーションは自分にとってもよい刺激になった。

中谷素之 2000 生涯にわたる学びへの意欲を考える(討論論文) 誌上シンポジウム 生涯学習社会における動機づけ 教育心理学論集, 29, pp. 63-68.

学会活動では、日本発達心理学会のニューズレター委員を1999年から2000年の2年間担当した。縁の下の力持ちの方々の存在を知り、学会活動への理解が体験的に深まったように思う。

日本発達心理学会広報委員会ニューズレター小委員会委員(1999年1月~2000年12月)